

# 「歴史の終焉」のあとの不確実な時代について考える〔前編〕 —“リベラルな国際秩序”が直面する諸困難にどう立ち向かうか—

旭 英 昭

## 目 次

### （前編）

1. はじめに：「歴史の終焉」の意味するもの
2. “リベラルな国際秩序”は、神話か（？）
3. “グローバル化の象”の“勝者”と“敗者”
4. なぜ、“民主主義の後退”は起きたのか

### （後編）

5. “忘れられた人々”とポピュリズムの沸騰
6. 大国化する中国と“新しい発展モデル”
7. むすび：空洞化した中産階層の復活の処方箋とは

東西冷戦が終結する直前に「歴史の終焉（*The End of History?*）」を告げたフランシス・フクヤマは、今日“リベラルな国際秩序（LIO）”が内（ポピュリズム）と外（中国が示す“新しい発展モデル”）から厳しい挑戦に直面しているのを目にして、どのような思いでいるのだろうか。LIOは、確かに、国際社会に平和をもたらし、途上国の側にも経済成長による富の増大と貧困の削減を実現した。しかし、その半面、それをイデオロギー的にも制度的にも支えた米国では、対外的な関与に対する疲労感（*global fatigue*）と併行して、国内では貧富の格差の増大、中産階層の空洞化、更にそれらを反映した政治面での分極化が進行する。この難局を乗り切る処方箋はあるだろうか。

## 1. はじめに：「歴史の終焉」の意味するもの （注1）

### （大歴史（History）史観の推移と資本主義的リベラル・デモクラシーの誕生）

1989年11月に“ベルリンの壁”が崩壊するその数カ月前、政治学者のフランシス・フクヤマは、

米外交雑誌『ナショナル・インタレスト』に、その後世界中で大論争を巻き起こすことになる「歴史の終焉（*The End of History?*）」（注2）を寄稿し、東西冷戦（イデオロギー対立）の終結を予告した。フクヤマの言う“歴史の終焉”とは、人間が生きていくなかで形成される歴史が実際に終わりを迎えて、その出来事に関する一連の報道が新聞紙面



旭 英昭（あさひ ひであき）

日本国際問題研究所客員研究員。前東京大学教授。著作に『平和構築論を再構築する 増補改訂』（日本評論社、2015）の他、寄稿論文に、“State, Society, and Social Capital,” *Journal of Human Security Studies*, Autumn 2016; “A Successful Model or an Uneasy Future for Peacebuilding,” *Asian Journal of Peacebuilding*, May 2017; 「Zからの“秘められた”メッセージ [前編] [後編]」、『証券アナリストジャーナル』2017年10-11月号等。

（本稿は筆者の個人的見解をとりまとめたものである。）